曲　目　解　説

歌劇『セミラーミデ』序曲は、ロッシーニ（1792－1868）が1822年に作曲したものである。ロッシーニは30歳の当時すでに欧州で作曲家としての名声を確立していて、歌劇『セミラーミデ』は彼の作品中最も注目を集めていたものである。台本は、ヴォルテール（1694－1778）の書いた二幕のオペラ・セリアであって、その規模は大きく、序曲もこれにならって長大なソナタ形式になっている。アンダンティーノの序奏部にあるホルンによる四重奏曲は、ウェーバー作曲『魔弾の射手』に模倣していると思われ、劇中のヒロインである王妃セミラーミデへの忠誠を誓う旋律である。セミラーミデは、王であり夫であるニーノを愛人のアツニールと共謀して暗殺する。アツニールは、セミラーミデを唆して彼女と王位と両方を手中に収めようとしたのだが、二人はニーノの亡霊によって破滅する。今年はロッシーニの生誕200年にあたる。が彼は50歳なのだ。何故なら２月29日生まれだから？

バレエ組曲『牝鹿』は、プーランク（1899－1963）が1923年に作曲したバレエ音楽を自ら1940年に５曲だけ抜粋して管弦楽編成の改訂を行ったもので、いわば演奏会用の組曲である。プーランク自身の説明では、「マリー・ローランサンの幾つかの絵から着想したものである。」とある。彼女はこのバレエのために装置と衣裳を担当してもいる。その装置とは、大きな白い部屋のなかに大型の青いソファーを置いただけのものである。状況の設定は、暑夏の午後、若い男性三人と若い婦人十六人の楽しげな、そして無邪気なまでのパーティーの様子を描きだしていて、その男女の繰り広げる踊りを次々に演じようというものであり、当時のパリのサロンの雰囲気をバレエ化したのである。５曲とも20世紀のバレエ音楽に相応しく変拍子または複合拍子であって、極端な非循環リズムである。この時期バレエ音楽を中心に芸術音楽の分野ではリズムの面で多方面にわたり試行錯誤が行われた。確かにセンスの高い作品も多く発表されたが、奇をてらう傾向のものもあった。筆者は、『牝鹿』について単純な循環リズムの上に書かれても充分に芸術性の高い作品になったと思うのだが。

『悲愴』交響曲は、チャイコフスキー（1840－1893）が1893年９月頃に作曲したらしい。彼は、同年10月28日に彼自身の指揮で初演を行っている。そしてその１週間後に彼は死去した。死因はコレラであった。楽譜出版商がこの折に『悲愴』と命名したという話があるが真偽は解らない。むしろ初演の後、弟のモデストが一度は『トラジーク（悲劇的）』と名付けたのにチャイコフスキー自身が不服で、再度モデストが『パテティーク（悲愴）』と命名し直して原題になったというのが事実らしい。一般的にこの交響曲は標題音楽という評価がされているが、それは描写的というのではなく、むしろ人生の絶望、敗滅、恐怖などの情緒を抽象的に表現していると思われる。

1893年は、チャイコフスキーにとって得意の時期であって『悲愴』とは程遠い情緒の中に彼はいたと思われる。同年８月にはサン・サーンス、グリーク等とともにケンブリッジ大学から博士号の授与を受け、さらに彼の交響詩『フランチェスカ・ダ・リミニ』は他の成功を色褪せさせる程の大成功を収めている。このような人生の享楽的（＝悲愴の反対語）ともいえる事毎に対して彼は全く逆方向の心性を模索していたのだろうか。幼いころからの精神薄弱的傾向や、たぶんそうであろうが弟モデストを対象として近親相姦且つ同性愛者であるチャイコフスキーは、人生の情緒を増幅出来るトランジスターを心に内蔵しているが故に一流の芸術家である。が、増幅の方向は時として逆方向かったのかも知れない。もしくは、絶望や敗滅、恐怖を音にしながら彼自身は、享楽を味わっていたのかも知れない。

（藤井部　勉）